
研究ノート

ヤングケアラーへの認識 —家庭内役割を担うこととの関連について—

鈴木 依子

Recognition of young carers —Relationship with Playing a Role in the family—

Yoriko Suzuki

The aim of this study was to examine how the roles they have experienced in the home have influenced the perception of young carers.

About 70% of the subjects had experience doing housework on behalf of their family members, but most of them helped for about 1~3 hours a week, commensurate with their age and level of growth. The reasons for this were also relatively positive, such as building good family relationships and self-actualization. Therefore, it tends to be difficult to recognize as a young carer who does housework on behalf of the family.

There was a significant difference in the relationship between general recognition of young carers and time spent playing a role in the home for elementary school students. Regarding the care of siblings and the care of grandparents, the longer the subjects themselves took care of their family members, the more they answered, "It is better as part of discipline."

In terms of the time spent in the family role and whether they were a young carer, those who perceived themselves as young carers spent more time taking care of themselves on behalf of their family members.

Key words: young carers, a role in the family, good family relationships, self-actualization

1. 研究の背景と目的

ヤングケアラーとは、「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている18歳未満の子ども」¹⁾と日本ケアラー連盟のヤングケアラープロジェクトにおいて定義されている。

思春期という不安定な時期を迎えている子ども自身が、親やきょうだいに何らかの困難が生じたとき、彼らが「ケアの担い手」とならざるを得ないことが少なくないといわれ²⁾、昨今、社会的な問題として取り上げられている。

ヤングケアラーについては、「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・医療・教育の連携プロジェクトチーム」とりまとめ報告³⁾において、令和4年度から3年間を「集中取組期間」として、ヤングケアラーの社会的認知度の向上に集中的に取り組むこととしており、年間を通じて、

様々な広告媒体を活用した広報啓発を行い、社会的認知度を高めることでヤングケアラーの普及推進に寄与することとしている。

こうしたなか、令和4年度の大阪府教育委員会の高校生を対象としたヤングケアラーの調査⁴⁾では、世話をしている家族が「いる」と回答したのは、全日制高校の回答者の5.7%で、昨年度の国勢調査の4.1%を1.6ポイント上回ることとなった。これはヤングケアラーが社会問題化し広く認知されつつあることを示している。

この調査では、世話をしている家族がいると回答した生徒の世話の頻度について、「ほぼ毎日」行っている生徒が4割程度で、世話に費やす時間について、「3時間以上」の生徒が2割程度いることが明らかとなっている。また、世話をしている家族がいると回答した生徒のうち、支援を望むとした回答をみると、進路・就職等の相談や学習面のサポートを望む回答、また、主に福祉サービス等の支援を求める声がそれぞれ約5割存在していた。

これまでの先行研究においても、ヤングケアラーは、学校外での勉強(塾や宿題等)、友人つきあい、部活動、

余暇活動を十分に行えない、身体的・精神的負荷が大きい等の状況に置かれるリスクが高くなるといわれている⁵⁾。

また、ヤングケアラーは、年齢や成長の度合いに見合わない重い責任を負うことで、本人の育ちや教育に影響があるといった課題がある⁶⁾との報告もある。

三富⁷⁾はヤングケアラーについて、学齢期の子どもにとって、家族生活における親子関係の逆転、不登校などの教育問題、社会生活や友人関係からの社会的孤立、低所得による貧困問題、人格形成と就職問題など、多くの深刻な問題があると述べている。

河本⁸⁾も、キャリアを積むことが大事な小中学生の時期に、十分なキャリアを積めないまま社会に出ることになったり、学業を断念することになったり、子どもの年齢相応の体験などをすることがないままになるなど、ヤングケアラーについて問題を指摘している。

このように、ヤングケアラーとなることは、学びたいのに親の介護で学校での就学機会が制限されたり、学力が低下したりすると同時に、さらには良好な友人関係が結ばなくなるなど、学齢期における社会性の獲得にも大きな影響を及ぼすことが明らかとなっている²⁾。

子どもの最善の利益を守るために、子どもの権利条約には、4つの権利が示されている。その一つとして、育つ権利がある。遊んだり勉強したりして、生まれ持った自分の能力をのばして成長していける権利とされている。本来保護者などが担うと想定されている家事や家族の世話などを、子どもが大人の代わりに日常的に行うことで子ども自身がやりたいことができなくなることは、子どもの育つ権利が侵害されていることに他ならない。

ただ、ヤングケアラーには、様々な問題が指摘されながらも、家庭内のデリケートな問題、本人や家族に自覚がないといった理由から、支援が必要であっても表面化しにくい構造となっている³⁾といわれている。

ヤングケアラー本人に自覚がない場合、そのことを当たり前と考える傾向があるため、成人と同等の責務を担うようなお世話をしている可能性もある。

そして、世間一般も、子どもの家庭内のお手伝いを正当化する考え方がいまだに多いことも事実である。あるテレビのトーク番組で、ゲストの俳優が小学生の時に毎日妹の幼稚園の送り迎えをしていたことを司会者に話したところ、司会者はそのことを大変評価していた。本人も、現在の自分の生き方にプラスになったと発言していた。

このように、家族の代わりに家事や家族の世話について、正当なお手伝いと行き過ぎたお手伝いの境界があいまいである現在、その経験を本人が有意義だと判断した場合、また、他者がそのことを評価した場合、家庭内役

割の一貫として、「行き過ぎたお手伝い」をしているヤングケアラーについて、正しい認識に至らない可能性が高い。

つまり、ヤングケアラーを見過ごすことなく、適切な支援につなぐためにも、皆が正しい認識を持つ必要性がある。

そのために、本研究では、ヤングケアラーへの関心が比較的高い傾向にある、福祉を学ぶ大学生を対象として、彼らがこれまで経験してきた家庭内役割が、ヤングケアラーを認識する際に、どの様な影響を及ぼしているのかについて検討することを目的とした。

II. 研究方法

1. 分析対象者と調査方法

本研究の調査は、対人援助職の資格取得を希望している京都市の女子大学生121名を対象に、googleフォームを用いてアンケートを作成し、web上で回答を求めた。

調査の結果、有効回答数は113名(92.6%)であった。

2. 調査項目

1) 基本属性

分析対象者の特性は家族構成ときょうだい構成、対象者自身が経験した家庭内役割とその時間、ヤングケアラーについて知っているかどうかについて尋ねた(表1)。

2) 一般的なヤングケアラーへの認識度

ヤングケアラーの担っている内容については、日本ケアラー連盟¹⁾の10項目が一般的であり、そのうち、比較的小子どもでも大人の代わりに家事や家族の世話のできそうな3項目について取り上げた。具体的には、「家族の代わりにきょうだいの世話や保育園の送迎をすることについて」「家族の代わりに家事(食事準備や掃除、洗濯)を行うことについて」「家族の代わりに祖父母などの外出や通院の付き添い、見守りなどをすることについて」である。

この3項目について、対象者のヤングケアラーとしての認識を確認するため、「子どもの役割ではない」「家族が困っているなら仕方ない」「しつけの一貫なら良い」「家族の役に立つことなので大切」の4つの選択肢で尋ねた。

また、ヤングケアラーについては、概ね18歳未満を対象年齢としている場合が多いので、今回は、小学生、中学生、高校生それぞれについて尋ねることとした。

3) 家庭内役割を担った経験について

対象者自身が実際に経験してきた家庭内役割について「家族の代わりにきょうだいの世話や保育園の送迎をしたかどうか」「家族の代わりに家事(食事準備や掃除、洗濯)を行ったかどうか」「家族の代わりに祖父母など

表1 分析対象者の基本属性

項目	カテゴリー	(単位 人)	
		人	%
世帯構成	核家族	105	(92.9)
	母子・父子世帯	8	(7.1)
きょうだい構成	一人っ子	12	(10.6)
	長子	42	(37.2)
	中間子	20	(17.7)
	末っ子	39	(34.5)
家族の代わりにきょうだいの世話や保育園の送迎をしたこと	いつもしていた	4	(3.5)
	時々していた	23	(20.4)
	全くない	86	(76.1)
家族の代わりに家事を行ったこと	いつもしていた	17	(15.0)
	時々していた	74	(65.5)
	全くない	22	(19.5)
家族の代わりに祖父母などの外出や通院の付き添い、見守りなどをした	いつもしていた	1	(0.9)
	時々していた	29	(25.7)
	全くない	83	(73.5)
1週間当たりの家庭内役割 従事時間	0時間	32	(28.3)
	1~3時間	37	(32.7)
	4~6時間	18	(16.0)
	7~9時間	15	(13.3)
	9~13時間	0	(0)
	14~16時間	7	(6.2)
	16~23時間	0	(0)
	24~26時間	2	(1.8)
	25~27時間	0	(0)
	28時間	2	(1.8)
	ヤングケアラーについて	聞いたこともあり、内容も知っている	108
聞いたことはあるがよく知らない		5	(4.4)
聞いたことはない		0	(0)

の外出や通院の付き添い、見守りなどを行ったかどうかについて尋ねた。また、上記のすべての内容について、実際に1週間にどの程度実施したかを数値化して回答してもらった。数値が高いものほど、家族内での役割が高いことを示している(表1)。

3. 分析方法

1) 家庭内役割時間と自身がヤングケアラーに当てはまるかについて

家庭内役割を担った時間を従属変数として、自身がヤングケアラーに当てはまるかを独立変数とした一元配置分散分析を行った。

2) 家庭内役割を担った理由

家族の代わりに家事や家族の世話を経験をした理由を尋ね、記述で回答を求めた。記述内容をデータとし、箇条書きのものはそのままに、複数の意味を含む長文の場合は、その意味を損なわないように意味単位で箇条書き

に整理した。そのうえで、記述を類似の内容にまとめ、カテゴリー化していった。

3) 家庭内役割を担った時間と一般的なヤングケアラー認識度との関連

分析は、小学生、中学生、高校生それぞれのヤングケアラーの認識度を従属変数とし、家庭内役割を担った時間を独立変数とする重回帰分析を行った。調整変数は家族構成、きょうだい構成を投入した。家族構成は、母子家庭(0=なし, 1=あり)、きょうだい構成は、長子を参照カテゴリーとする3つのダミー変数を作成した。

分析には統計処理ソフト(SPSSver28.0)を用い、有意水準5%未満とした。

4. 倫理的配慮

調査対象者に対しては、本研究の目的や本研究で得られた情報は論文投稿・学会発表・報告書作成等以外には用いないこと、情報から個人が特定できないように配慮

すること、調査への参加は強制ではなく個人の自由意志であること、得られた情報は漏えいのないように保管すること等を文書で説明した。本調査の趣旨に同意の得られた場合のみ調査に参加していただけるように依頼した。

III. 結果

1. 家庭内役割を担った時間と自身がヤングケアラーに当てはまるかについて

対象者自身が、家庭内役割を担った時間は、平均で1週間4.04時間であった。その内訳は、週1時間未満から最長28時間であった。1週間のうち1～3時間が32.7%と最も多く、そのうち1時間未満が2割を占めていた。14時間以上は11名(9.8%)だった。全く世話をした経験のないものは、32名(23.8%)だった。

また、家庭内役割を担った経験があるもののうち、「あなたはヤングケアラーに当てはまるかどうか」について尋ねたところ、「当てはまる」と回答したものは、全体の3.5%で、その内訳は、14時間以上で3名、28時間以上で1名だった。

家庭内役割を担った時間について、自身がヤングケアラーに当てはまるかどうかについて一元配置分散分析を行った。その結果、「当てはまる」は「わからない」「当てはまらない」よりも平均値が高かった。つまり、ヤングケアラーだという認識を持っているものほど、家庭内役割を担った時間が長いことが分かった(表2)。

2. 家庭内役割を担った理由

家庭内役割を担った理由については、83の記述が得られ、その内容は2つのカテゴリー及び7のサブカテゴリーに大別された(表3)。

第一のカテゴリーは、「自己実現」であった。家事のスキルが身につく、自己肯定感の向上、将来の一人暮らしに備える、感謝されるといった4つのサブカテゴリーから形成されていた。第二のカテゴリーは「良好な家族関係」で、家族の負担軽減、家族とのコミュニケーション、家族の役に立つことといった、3つのサブカテゴリーから形成されていた。

3. 家庭内役割を担った時間と一般的なヤングケアラー認識度の関連

重回帰分析の結果は以下の通りであった。

1) 小学生についての一般的なヤングケアラー認識度と家庭内役割を担った時間

「小学生が家族の代わりに、きょうだいの世話や保育園の送迎を行うこと」については、「子どもの役割ではない」よりも「しつけの一貫としてなら良い」と考える者は、家庭内役割を担った時間が有意に高かった。「子

表2 家庭内役割を担った時間と自身がヤングケアラーに当てはまるかについて

	N	家族の代わりにお世話した時間		
		平均値	SD	F値
ycに当てはまる	4	17.5	7	
ycに当てはまらない	103	3.16	4.49	21.75***
わからない	6	10.17	8.95	

*** $p < .001$

表3 家庭内役割を担った理由

カテゴリー	サブカテゴリー
自己実現	家事のスキルが身につく 自己肯定感の向上(自信がつく) 将来の一人暮らしの備える 感謝される
良好な家族関係	家族の負担軽減 家族とのコミュニケーションツール 家族の役に立つこと

どもの役割ではない」と「家族が困っているなら仕方ない」では有意差は認められなかった。同様に「子どもの役割ではない」と「家族の役に立つことなので大切」の間にも有意差は認められなかった。

「小学生が家族の代わりに祖父母などの外出や通院の付き添い、見守りを行う」については、「子どもの役割ではない」よりも「しつけの一貫としてなら良い」と考える者のほうが、家庭内役割を担った時間は有意に高かった。「子どもの役割ではない」と「家族が困っているなら仕方ない」では有意差は認められなかった。同様に「子どもの役割ではない」と「家族の役に立つことなので大切」の間にも有意差は認められなかった。

「小学生が家族の代わりに家事(食事準備や掃除、洗濯)を行ったかどうか」については、家庭内役割を担った時間との間に有意な関連は認められなかった(表4)。

2) 中学生についての一般的なヤングケアラー認識度と家庭内役割を担った時間

「中学生が家族の代わりに、きょうだいの世話や保育園の送迎を行うこと」については、「子どもの役割ではない」と「家族が困っているなら仕方ない」「しつけの一貫としてなら良い」「家族の役に立つことなので大切」の間には、家庭内役割を担った時間には有意な関連はなかった。

「中学生が家族の代わりに家事(食事準備や掃除、洗濯)を行ったかどうか」や「小学生が家族の代わりに祖父母などの外出通院の付き添い、見守りを行う」につい

表4 ヤングケアラー認知度と家庭内役割を担った時間との関連(小学生)

	β	β	β
きょうだい構成1(一人子=1)	-0.161	-0.168	-0.148
きょうだい構成1(中間子=2)	-0.047	-0.102	-0.045
きょうだい構成3(末っ子=3)	-0.097	-0.115	-0.048
家族構成(母子家庭=0)	-0.209	-0.195	-0.214
家族の代わりに兄弟の世話や保育園の送迎をする			
子どもの役割りではないvs家族が困っているなら仕方ない	-0.082		
子どもの役割りではないvsしつけの一貫なら良い	0.302 ***		
子どもの役割りではないvs家族の役に立つことなので大切	-0.031		
家族の代わりに家事(食事準備や掃除,洗濯)をおこなう			
子どもの役割りではないvs家族が困っているなら仕方ない		0.094	
子どもの役割りではないvsしつけの一貫なら良い		0.017	
子どもの役割りではないvs家族の役に立つことなので大切		0.091	
家族の代わりに祖父母などの外出や通院の付き添い,見守りなどをすること			
子どもの役割りではないvs家族が困っているなら仕方ない			0.003
子どもの役割りではないvsしつけの一貫なら良い			0.3 ***
子どもの役割りではないvs家族の役に立つことなので大切			-0.015
Adjusted R ²	0.106 **	0.01	0.092 *

*** : $P < .001$, ** : $P < .01$, * : $P < .05$

表5 ヤングケアラー認知度と家庭内役割を担った時間との関連(中学生)

	β	β	β
きょうだい構成1(一人子=1)	-0.15	-0.195	-0.173
きょうだい構成1(中間子=2)	-0.057	-0.178	-0.065
きょうだい構成3(末っ子=3)	-0.084	-0.097	-0.074
家族構成(母子家庭=0)	-0.215	-0.106	-0.208
家族の代わりに兄弟の世話や保育園の送迎をする			
子どもの役割りではないvs家族が困っているなら仕方ない	0.015		
子どもの役割りではないvsしつけの一貫なら良い	0.199		
子どもの役割りではないvs家族の役に立つことなので大切	-0.065		
家族の代わりに家事(食事準備や掃除,洗濯)をおこなう			
子どもの役割りではないvs家族が困っているなら仕方ない		0.13	
子どもの役割りではないvsしつけの一貫なら良い		0.075	
子どもの役割りではないvs家族の役に立つことなので大切		0.196	
家族の代わりに祖父母などの外出や通院の付き添い,見守りなどをすること			
子どもの役割りではないvs家族が困っているなら仕方ない			-0.037
子どもの役割りではないvsしつけの一貫なら良い			0.064
子どもの役割りではないvs家族の役に立つことなので大切			0.107
Adjusted R ²	0.046	0.02	0.016

*** : $P < .001$, ** : $P < .01$, * : $P < .05$

ても、同様に、家庭内役割を担った時間には有意な関連はなかった(表5)。

3) 高校生についての一般的なヤングケアラー認知度と家族の代わりにお世話した時間

「中学生が家族の代わりに、きょうだいの世話や保育園の送迎を行うこと」については、「子どもの役割ではない」と「家族が困っているなら仕方ない」「しつけの一貫としてなら良い」「家族の役に立つことなので大切」

の間には、家庭内役割を担った時間には有意な関連はなかった。

「中学生が家族の代わりに家事(食事準備や掃除,洗濯)を行ったかどうか」や「小学生が家族の代わりに祖父母などの外出通院の付き添い,見守りを行う」についても、同様に、家庭内役割を担った時間には有意な関連はなかった(表6)。

表6 ヤングケアラー認知度と家庭内役割を担った時間との関連（高校生）

	β	β	β
きょうだい構成1（一人子=1）	-0.197	-0.178	-0.18
きょうだい構成1（中間子=2）	-0.085	-0.089	-0.076
きょうだい構成3（末っ子=3）	-0.102	-0.092	-0.059
家族構成（母子家庭=0）	-0.216	-0.202	-0.174
家族の代わりに兄弟の世話や保育園の送迎をする			
子どもの役割りではない vs 家族が困っているなら仕方ない	-0.092		
子どもの役割りではない vs しつけの一貫なら良い	0.031		
子どもの役割りではない vs 家族の役に立つことなので大切	-0.015		
家族の代わりに家事（食事準備や掃除、洗濯）をおこなう			
子どもの役割りではない vs 家族が困っているなら仕方ない		0.141	
子どもの役割りではない vs しつけの一貫なら良い		0.188	
子どもの役割りではない vs 家族の役に立つことなので大切		0.365	
家族の代わりに祖父母などの外出や通院の付き添い、見守りなどをする			
子どもの役割りではない vs 家族が困っているなら仕方ない			-0.091
子どもの役割りではない vs しつけの一貫なら良い			-0.085
子どもの役割りではない vs 家族の役に立つことなので大切			0.079
Adjusted R ²	0.007	0.049	0.027

*** : $P < .001$, ** : $P < .01$, * : $P < .05$

IV. 考察

1. 家庭内役割を担った時間と自身がヤングケアラーに当てはまるかどうかについて

濱嶋ら⁵⁾によると「学校がある日に1日2時間以上、かつ、学校がない日に1日4時間以上のケアをしている高校生は、高校生のなかでも、ケアをしている時間が比較的長く、その意味で負担が大きい」と報告している。本研究においても、自分自身をヤングケアラーだと認識していたものは、家庭内役割を担った時間が1週間に14時間以上であったことから、家族の代わりにお世話をした時間が長くなるほどヤングケアラーとしての認識が高くなり、ケアの負担を感じていることが示唆された。

2. 家庭内役割を担った理由

本研究の対象者の7割が、家族の代わりに家事や家族の世話をした経験があった。また、その理由は、大別すると「自己実現」と「良好な家族関係を築くこと」に分けることができた。自己実現は、家事力のスキルアップや一人暮らしに備えるなど、自分の将来にとって役立つという認識とともに、感謝されることや褒められることで自己肯定感の向上につながっていることが明らかとなった。家族の代わりに家事や家族の世話をすることは、それが適切な内容と時間であり、子どもへの負担が少ない場合、子どもの成長にとって有益といえるのかもしれない。しかし、世話を頼む大人には、子どもに過剰な家庭内役割負担を担わすことのないように、ヤングケ

アラールについての十分な知識が必要である。

一方で、良好な家族関係を築くという理由は家族の代わりに家事や家族の世話という家庭内での役割を実行することで、家族関係を維持できると考えているものだった。具体的には、母親の負担軽減や家族が円満でいられるなど、子どもに精神的負担を強いる可能性が高い傾向がうかがえた。

北山ら²⁾によると、家事の手伝いや小さい子どもの世話をすることが、家庭教育や「お手伝い」であるためには、保護者の責任のもとで行われることが必要であり、家庭内で担う役割が成人と同等の責任を担うようなものは「お手伝い」の域を超えていると述べている。良好な家族関係の維持のために、子どもが極端に気を使い、大人の身体的、精神的負担軽減のために、自らが犠牲となることがあってはならないといえる。

3. 一般的なヤングケアラー認知度と家庭内役割を担った時間の関連について

ヤングケアラーへの認知度のうち、「小学生が家族の代わりにきょうだいの世話や保育園の送迎を行うこと」や、「小学生が家族の代わりに祖父母などの外出や通院の付き添い、見守りを行うこと」については、対象者自身が家庭内での役割を担った時間の長いものほど、「しつけの一貫としてなら良い」と回答していた。

本研究では、対象者のほとんどがヤングケアラーについて理解をしていると回答していたが、実際に家族の代わりに育児や家族の見守りを長時間実施した場合、「し

つけの一貫なら良い」と判断することで、自身の行為を肯定的に理解しようとしたと推察される。

ただ、「小学生が家族の代わりに家事(食事準備や掃除、洗濯)を行ったかどうか」については、有意な差はみいだせなかった。きょうだいの世話や祖父母等の見守りなどの世話をしたことが全くないと回答したものが8割程度だったことに比べて、家族の代わりに家事をしたことが全くないと答えたものは2割程度にとどまったことが理由と考えられる。つまり、多くのものが、家族の代わりに家事を経験しており、家族内役割を担う理由に、家事力のスキルアップや将来に役立つことなどを挙げていることから、家族の代わりに家事を行うことについては、当事者である子ども自身が、ヤングケアラーであることを自覚しづらい状況にあることが推察される。

家事の手伝いは家族として当然の役割として子どもに期待され、負担が比較的小さい状況であれば、その存在は潜在化しやすい可能性があるとの指摘⁵⁾もあり、日常的な家事を代行することは、第三者から見えにくく、子どもによるケアが常態化する可能性が高いことが明らかとなった。

また、本研究では小学生以外の中学生と高校生については、一般的なヤングケアラーへの認識度と家庭内役割を担う時間の関連については、いずれも有意差がなかったことから、年齢が上がるとともに、家族の代わりに家事や家族の世話をすることを正当化する傾向が高いことが明らかとなった。

中学生、高校生と年齢が高くなれば、小学生に比較して、身体的にも精神的にも成長するため、手伝いをするのは当たり前と考え、ヤングケアラーの可能性を無意識に排除してしまう危険性があることが推察された。

小学生に限らず、中学生、高校生になっても、子どもが親の代わりに家事や家族の世話をすることは、ヤングケアラーとなる可能性が高いため、社会全体で認識して環境を整える必要がある。

V. まとめ

福祉を学ぶ大学生を対象として、彼らがこれまで経験してきた家庭内役割が、ヤングケアラーを認識する際に、どのような影響を及ぼしているのかについて検討することを目的とした結果、以下のことが明らかとなった。

一般的なヤングケアラー認識度と家庭内役割を担った時間の関連については、本研究では、小学生の場合について有意差が認められた。きょうだいの世話や祖父母の見守りについては、対象者自身が家族の代わりに世話をした時間の長いものほど、「しつけの一貫としてなら良

い」と回答していた。

家庭内役割を担った時間と自身がヤングケアラーに当てはまるかについては、ヤングケアラーだという認識を持っているものほど、家族の代わりに家事や家族の世話をした時間が長いことが分かった。

対象者の7割程度は、家族の代わりに家事を行った経験があったが、大部分は、1週間に1~3時間程度であった。その理由も良好な家族関係を築くためや自己実現のためという、比較的前向きなもので、年齢や成長の度合いに見合った手伝いであることが推察された。したがって、家族の代わりに家事を行うことは、ヤングケアラーとして認識しづらい傾向にあるといえる。

今回の研究では、ヤングケアラーに関する認識について家庭内役割との関連で分析を行ったが、福祉を学ぶ大学生を対象としたため限定的な結果となった可能性が高い。今後は、対象者を広げて、ヤングケアラーへの認識度について、さらなる分析が必要と考える。

文献

- 1) 一般社団法人 日本ケアラー連盟 ヤングケアラープロジェクト (<https://youngcarerpj.jimdofree.com> 2022.11.1)
- 2) 北山沙和子・石倉健二：ヤングケアラーについての実態調査—過剰な家庭内役割を担う中学生—, 兵庫教育大学学校教育学研究, 2015, 27, 25-29
- 3) 厚生労働省・文部科学省：ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクトチーム報告 2021.5 (http://www.mext.go.jp/content/20210521-mxt_jidou02_000015177_b.pdf 2022.10.15)
- 4) 大阪府教育委員会：府立高校におけるヤングケアラーに関する調査結果について(概要)2021.12 (<http://www.pref.osaka.lg.jp/hodo/index.php?site=fumin&pageId=43120> 2022.10.14)
- 5) 濱島淑恵・宮川雅充：高校におけるヤングケアラーの割合とケアの状況—大阪府下の公立高校の生徒を対象とした質問紙調査の結果より—, 厚生の指標, 2018, 65(2), 22-29
- 6) 経営コラム. ヤングケアラーの実態に関する調査研究, 日本総研, 2022 (<http://www.jri.co.jp/page.jsp?id=102439> 2022.10.1)
- 7) 三富紀敬. イギリスの在宅介護者, ミネルヴァ書房, 2000, 393-481
- 8) 河本秀樹. 日本のヤングケアラー研究の動向と到達点, 敬心・研究ジャーナル, 2020, 4(1), 45-53